

ナシ害虫 チュウゴクナシキジラミの発生・被害に注意する！

佐賀県果樹試験場 病害虫研究担当

衛藤友紀

チュウゴクナシキジラミ（写真1：成虫、以下、キジラミ）は平成23年に中国大陸から日本（佐賀県）に侵入してきたナシの害虫です。侵入当初は、発生生態が不明であることはもちろん、登録農薬がなかったため、生産現場ではその防除に大変苦慮しました。その後は関係機関との協力・連携のもと試験研究が進められ、本虫の生態、有効薬剤が明らかにされたことにより、本虫の発生は沈静化して、被害も収まりました。



写真1 成虫

ところが、昨年の初夏以降、薬剤散布を実施しても、キジラミの密度が低下しない事例が佐賀県内の数園で確認されました。その内の一園で薬剤検定を実施したところ、有効薬剤であるネオニコチノイド系薬剤（IRACコード：4A、以下（ ）内の数字・記号はIRACコードを示す）の殺虫効果が低いことが明らかとなりました（表1）。このことから、発生が増加した要因の一つとして、本系統薬剤に対するキジラミの感受性が低下していることが疑われました。同じく本虫が分布している山口県においては、近年ネオニコチノイド系に感受性が低下した個体群が発生して、被害が問題となっていることから、本県でも同様の現象が起きている可能性があります。

ちなみに、本県病害虫防除のてびきに掲載されているキジラミ防除薬剤のうち、ネオニコチノイド系薬剤は、アクタラ顆粒水溶剤、ダントツ水溶剤、アルバリン/スタークル顆粒水溶剤、アドマイヤー水和剤、ベストガード水溶剤等です。本系統の薬剤は、アブラムシ類、シンクイムシ類、コナカイガラムシ類およびカメムシ類等のように比較的多くの害虫に登録（効果）があるため、キジラミ防除を含めて、かなりの頻度で使用されてきました。今後も本系統薬剤を使用していくためには、本誌2020年1月号等で紹介したIRACコードをしっかりと確認して、異なる系統の薬剤を組み合わせたナシ害虫防除体系で臨む必要があります。代替薬剤としては、例えばアブラムシ類ならばウララDF（29）、エクシレルSE（28 シンクイムシ類にも登録あり）、カイガラムシ類ならばトランスフォームフロアブル（4C アブラムシ類にも登録あり）、カメムシ類ならばテルスター水和剤（3A シンクイムシ類にも登録あり）等が挙げられます。薬剤によっては、ハダニ類のリサージェンス（異常増殖）を生じる場合もありますが、ハダニ類防除も同時に実施することも大切です。

今後の防除時期としては5月中旬頃、7月上旬頃です（第1回目は3月下旬～4月上旬でした）。これまでの調査結果から、7月頃に発生の大きなピークを迎えるので、その前の世代にあたる5月頃のキジラミを徹底的に防除する必要があります。**防除のポイント**としては、飛ぶことがなく、成虫より動きが緩慢な幼虫（写真2）を防除の主な対象とすることで、その理由としては、①幼虫は成虫と比較



写真2 左：若齢幼虫 右：老齢幼虫

して薬剤に対する感受性が高い傾向にある、②成虫は飛び跳ねるので虫体に薬液が付着しにくい、さらに薬剤散布後はその樹を忌避して、他のナシ園に移動する等が挙げられます。また、**見つけるポイント**としては、①キジラミの寄生葉は虫の分泌物（甘露）に雑菌が生じて「黒いすす」で汚れている、②幼虫は白い綿のような分泌物（ロウ物質）を付けている、③枝葉が繁茂している棚面付近の葉に寄生することが多い、これらを目安に園内を観察します。なお、**①近年は暖冬傾向にあること、また②温暖化の影響により、これまでよりも発生が早まっている傾向があるので、先述の時期を一つの目安にして、それより前から園内の発生状況を観察します。なお、これまで発生が認められなかった園も発生の有無を確認してください。**

キジラミは、成虫・幼虫ともに先述のように棚面付近の葉に寄生することが多く、棚面から離れた徒長枝の上部等は少ない傾向にあります。このような場所は、薬液が付着しにくいので、これまで本誌で説明してきたように、スピードスプレーヤーで散布する場合は、「全列走行」、「低速度」を心掛けます。手散布の場合も丁寧に散布します。

キジラミの防除薬剤としては、ネオニコチノイド系薬剤の効果が明らかに低い、または低いと感じている園ではディアナWDG等に変更します。一方、効果がまだ期待できる園ではこれまでどおり、ネオニコチノイド系薬剤を使用します。ただし、どの場合においても本系統薬剤に偏重したナシ害虫の防除体系を改める必要があります。

果樹試験場では、今回の件を受けて、キジラミの薬剤感受性検定と有効薬剤を探索するために防除試験等を予定しており、得られたデータ等については順次報告します。

表1 チュウゴクナシキジラミ成虫に対する各種薬剤の殺虫効果（2019年）

薬 剤 名	IRAC コード	希釈倍数	補 正 死亡率 (%)
アドマイヤー水和剤	4A	1,000	30.4
ダントツ水溶剤	4A	2,000	0
アルバリン顆粒水溶剤	4A	2,000	0
ディアナWDG	5	5,000	91.7

試験方法：薬液を噴霧したナシ枝葉に成虫を放飼して、放飼4日後に生死を判定した。水処理区の生存率は92.3%であった。**補正死亡率**：値が高いほど防除効果が期待できる。